

漢文「矛盾」

原文・書き下し文・現代語訳をわかりやすく解説

漢文「矛盾」テスト対策ポイント

- ・「矛盾」の意味は「話のつじつまが合わない」こと。読み方は、「むじゅん」。
- ・由来は、中国戦国時代の学者「韓非(かんぴ)」が記した書物「韓非子(かんぴし)」に書かれたたとえ話。
- ・「鬻ぐ」は「ひさ(ぐ)」と読む。意味は「売る」
- ・「楚人有鬻盾与矛者」の「与」は「○与△」で「○と△」という助詞として使っている
- ・「能」は「よく～」と読んで、「～できる」という意味になる
- ・「莫」は「～するもの莫(な)し」と読んで、「否定」の意味になる
- ・「能」と「莫」を合わせて使うことで、「～することはできない」となる
- ・「物に於いて陥さざる無きなり」という部分だけれど、ここで「無」と「不」が並んで使われていることで「二重否定、強い否定」となるよ。
- ・「～しないものは無い」ということで「必ず～できる」という意味になるんだ。
- ・「弗能」は「あたはざる」と読ませて、「～することができない」という意味になる。

「矛盾」の意味（解説）

「矛盾」は現代の日本で一般的に使われている故事成語だね。
意味は「話の前後のつじつまが合わない」や「二つの物事が食い違っていてつじつまが合わない」こと。読み方は「むじゅん」だね。

由来となった書物

「矛盾」のエピソードが書かれているのは、中国戦国時代の法家（学者）の「韓非（かんぴ）」という人の著書「韓非子（かんぴし）」。
韓非は、当時の中国の儒家（儒学・儒教に尽くす人）を批判するために、たとえ話として「矛盾」のエピソードを記しているよ。



余裕があったら読もう！

韓非が「矛盾」のエピソードを書いた理由

儒家は「徳」によって国を治めるべきという主張、対して韓非は「法」によって国を治めるべきという主張だったんだ。

儒家の主張では、「堯（ぎょう）」と「舜（しゅん）」という伝説の皇帝がいるんだ（神話的な存在と考えられている）。

それによると、「堯」は徳によって完璧にすばらしく国をよく治めていた。そして、これまた素晴らしい人物で、世の中の良くない部分を徳によって改めていった「舜」が血縁関係でないのに「堯」に認められ、あとをついで皇帝となった、と説いているんだ。

つまり両者ともが最高の人物で、徳によって理想的な政治を行うことができる、という主張だね。

それに対して、韓非は

「堯」の政治は完璧だったはずなのに、どうして「舜」は世の中の良くないところを改めることができたのだ？（完璧なら、直すところなどないだろう、ということ）と、儒家の主張のつじつまの合わないところを指摘したんだ。

その流れで、たとえ話として「矛盾」のエピソードを記したんだよ。

「矛盾」あらすじ

楚の国の人々が矛と盾を売っていた。

どちらも無敵な矛と盾だという主張に、ある人が「無敵同士を戦わせたらどうなる」と指摘すると、黙るしかなかった。



「矛盾」白文（原文）

楚人有鬻楯与矛者。

誉之曰、

「吾楯之堅、莫能陷也。」

又誉其矛曰、

「吾矛之利、於物無不陷也。」

或曰「以子之矛、陷子之楯、何如」

其人弗能応也。

「矛盾」書き下し文

矛盾
 楚人有鬻楯与矛者。
 誉之曰、
 「吾楯之堅、莫能陷也。」
 又誉其矛曰、
 「吾矛之利、於物無不陷也。」
 或曰、
 「以子之矛、
 陷子之楯、
 何如」
 其人弗能
 応也。

楚人（そひと）に楯と矛（ほこ）とを鬻（ひさ）ぐ者有り。

之を誉（ほ）めて曰はく、

「吾（わ）が楯の堅きこと、能（よ）く陷（とほ）すもの莫（な）きなり。」と。

又其の矛を誉めて曰はく、

「吾が矛の利（と・するど）きこと、物に於いて陷さざる無きなり。」と。

或るひと曰はく、「子（し）の矛を以つて、子の楯を陷さば何如（いかん）。」と。

其人応ふる能（あた）はざるなり。



「矛盾」現代語訳

盾と矛を売っている楚の国の人が出た。

これ（売っている盾）を自慢して言うには、

「私の盾の堅さは、（この盾を）つきとおすものは無いくらいだ。」と。

また、その矛を自慢して言うには、

「私の矛の鋭さは、どんなものでも（この矛なら）つきとおせないものは無いくらいだ。」と。

ある人が言うには、

「（では）あなたのその（なんでもつきとおす）矛で、（つきとおすものは無い）盾をつきとおそうとするとどうなるのか。」と。

その（盾と矛を売っていた）人は答えることが出来なかった。

「矛盾」古語・語句の意味

| 語句 | 意味 |
|------|--|
| 楚人 | 「楚」とは、戦国時代の中国にあった国。戦国時代に有力だった7つの国（戦国七雄）のうちの一国。「楚人」は、「楚」の国の人ということ |
| 楯 | 盾のこと |
| 矛 | 槍のような、持ち手のついている武器のこと |
| 鬻ぐ | 売る |
| 能く | ～できる |
| 陷す | つきやぶる |
| 莫き | 無い |
| 利き | するどい |
| 於いて | ～について、～にとって |
| 何如 | どうなる |
| 能はざる | できない |



「矛盾」内容とポイント

「矛盾」の漢文の内容とポイントを解説していくよ。

「楚人有鬻盾与矛者」

書き下すと「楚人に楯と矛とを鬻ぐ者有り。」となるね。

まず「盾」と「矛」を売っている者がいたというところから始まっているね。

「矛」はイメージとしては「槍」に近いような武器だと思えば大丈夫。

ここでは、「鬻ぐ」の読み方がテストでは出題されやすいので、おさえておこう。

誉之曰、「吾楯之堅、莫能陷也。」

書き下すと、「之を誉めて曰はく、『吾（わ）が楯の堅きこと、能（よ）く陷（とほ）すもの莫（な）きなり。』と。」となるね。

矛と盾を売っていた人は、自分の売っているものがいかに素晴らしいかをアピールして、できるだけ買ってほしいから、この盾と矛がいかにすばらしいかを「ほめる」んだよね。

まずは「盾」のことを、「この盾をつきやぶることが出来るものなんて、この世にはないよ！それぐらい堅くて、すばらしい盾なんだよ！」とアピールしたんだ。

又誉其矛曰、「吾矛之利、於物無不陷也。」

書き下すと、「又其の矛を誉めて曰はく、『吾が矛の利（と・するど）きこと、物に於いて陷さざる無きなり。』と。」となるね。

こんどは矛をアピールする番。そこで、盾のときと同じように「この矛はとても鋭くて、どんなものだってつきやぶるんだ！！この矛でつきやぶれないものなんて、この世にはないよ！」と言ったんだね。



ちなみに、「利」の読み方は、「と(き)」または「するど(き)」があって、教科書によってどちらが使われているかが異なるので、テストのときは自分が使っている教科書に合わせると安心だよ。

或曰「以子之矛、陷子之盾、何如」

書き下すと、或るひと曰はく、「子(し)の矛を以つて、子の楯を陷さば何如(いかん)。」と。

何でも突き通すことができる「矛」で、どんなものでも突き通すことができない「盾」を突けばどうなるのか、という矛盾の中心となる部分だね。

最強の矛で最強の盾を突けばどうなるのか、最強のものは同時に2つは存在しないということを行っているんだ。

「其人弗能応也」

結局商人は質問に答えることができなかったね。

それはそうだよね、どちらも「無敵」と言ってしまったんだから。

「矛盾」重要文法

「矛盾」の漢文でつかわれている重要な文法を紹介していくよ。

「楚人有鬻盾与矛者」

ここで使われている「与」は「○与△」で「○と△」という助詞として使っているよ。書き下すときに「与える」という動詞の意味で扱わないことが重要だよ。



「莫能陷也」

ここは「能く陷す莫きなり」となって「突き通すことなど出来ない」という意味になるね。

「能」は「よく～」と読んで、「～できる」という意味になるよ。
英語の「can」のイメージだね。

「莫」はあまり見ることがない漢字なので注意が必要だね。「～するもの莫し」と読んで、「否定」の意味になるよ。

「能」と「莫」を合わせて使うことで、「～することはできない」となるんだ。

「於物無不陷也」

「物に於いて陷さざる無きなり」という部分だけれど、ここで「無」と「不」が並んで使われていることで「二重否定、強い否定」となるよ。

「～しないものは無い」ということで「必ず～できる」という意味になるんだ。

ここでは、「私の矛で突き通せないものはない（どんなものでも突き通すことができる）」と商人は言っているんだね。

「其人弗能応也」

ここでは「弗能」に注意です。「弗能」は「あたはざる」と読ませて、「～することができない」という意味になるよ。

つまり「答えることができなかった」となるね。

